授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2831 号

Glenoid Bone Loss Is a Risk Factor for Poor Clinical Results After Coracoid Transfer in Rugby Players With Shoulder Dislocations

ラグビー選手の肩関節脱臼に対する関節窩骨欠損は烏口突起移行術の術後成績不良の危険因子である

渋谷 研太（しぶや けんた）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、本論文は、ラグビー選手の大規模コホートにおいて、烏口突起移行術の術後成績不良の危険因子は 20%以上の関節窩骨欠損であり（オッズ比 9.8)、Bristow 法と Latarjet 法といった術式によらないことを報告した。
【新規性、創造性】近年のシステマティックレビューでは、Bristow 法と Latarjet 法の 2 つの方法で臨床成績に差がないことが報告されているが、対象をラグビー選手に限定したコホート研究はない。また、大きな関節窩骨欠損が鏡視下バンカート修復術の術後成績に影響を与えることは報告されているが、烏口突起移行術の報告はなく、烏口突起移行術の術後成績不良の危険因子は不明である。本研究は対象をラグビー選手に限定した大規模コホートであること、関節窩骨欠損が烏口突起移行術の術後成績にも影響を与えることを示したことに新規性がある。
【方法・研究倫理】術後成績不良を、Rowe スコアが 70 点未満かつ WOSI スコアが 630 点以上と定義し、主解析は、術後成績不良に影響を与える因子を特定するために、多重ロジスティック回帰分析を行い、副解析は、Bristow 法と Latarjet 法の術後成績と合併症発生率を Mann-Whitney U 検定を用いて比較した。差は $P<0.05$ で統計的に有意とみなされた。すべての患者は、研究参加についてインフォームド・コンセントを行った。本研究は当院の施設内審査委員会の承認を得た。
【学術的意義】烏口突起移行術は関節窩骨欠損を補填する有効な方法であるが、関節窩幅の 20%を超える関節窩骨欠損を有する場合、烏口突起移行術を施行したとしても完全な安定性を得ることが出来ないことが示された。今回の結果は、肩外科医が、関節窩骨欠損が大きくなる前に、早期手術を推奨すべきであることを示唆していると思われた。
【考察・今後の発展】今後、術後成績不良の詳細を明らかにし、心理的影響の要素も考慮しつつ、術後成績不良因子を追求していく必要がある。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。